

向社会的行動に対する恥・罪悪感の機能¹

久 崎 孝 浩

Abstract

Research and theory on shame and guilt have received considerable attention in the last decades and have implied that these emotions have moral function. Nevertheless, the relation of shame and guilt to moral behavior, especially prosocial behavior, has been little examined and discussed. This article reviews various theoretical and empirical works on prosocial behavior and shame or guilt. First, prosocial behavior is defined and the process of prosocial behavior is described. Second, anticipatory guilt over inaction, self-regulatory function of shame and guilt, and the likelihood of the role of guilt or shame in the process of prosocial behavior are discussed. Third, the relation of social emotions, especially guilt, to other-oriented empathy that is the main factor in generating prosocial behavior is discussed from the constructive and developmental perspectives. Finally, a model stating that the relation between other-oriented empathy and prosocial behavior is mediated by guilt is presented.

Key words: prosocial behavior, empathy-altruism path, guilt and shame, regulatory function

1. 向社会的行動とは何か

人は少なくとも日常において、他者が苦痛、悲しみ、困惑、苛立ちといったネガティブな情動を発しているところを目撃したならば、それが自分自身に起因していようがまいが、その他者の情動を低減しようと様々な方法を試みるものである。それは別に成人に限るものではなく、他者の発する種々の情動を弁別し、その情動の方向性や意味、主観性を理解し始める1歳過ぎの幼い子ども (e.g., Saarni, Campos, Camras, & Witherington, 2006) でさえ、例えば母親の苦痛を目撃した際に、その母親の頭を撫でたり、声をかけたり、気をそらせようと玩具を持ってきたりする行動を示す (e.g., Bischof-Kohler, 1991; Zahn-Waxler, Radke-Yarrow, Wagner, & Chapman, 1992)。そこには、幼い子どもが母親の痛みを察し、その痛みを低減させたいという心の動きを垣間見ることができよう。このように、未だ身体的・社会的にも成熟したとは言えない幼い子どもにも半ば無条件に他者を助ける心のはたらきが備わっていることは驚くべきことであるが、それはまたある意味、自己や対人関係の形成・維持・洗練と相互の助け合いは不可分のものであると

いう人のもつ天性を暗示しているようでもある。

心理学領域では一般に、上記のような他者の苦境に対する援助行動を“向社会的行動 (prosocial behavior)” という。しかし、この向社会的行動という用語に一旦目を向けてみれば、その意味には研究者によって若干の違いがあるようである。例えば、Mussen & Eisenberg-Berg (1977) は、向社会的行動を、外的報酬を期待することなくまたときにコストが伴うとしても、ある他者や集団を助けようとしたり、その人や集団の利益になることをしようとしたりする行動としている。また、杉山 (1991) は、単に、他者や集団を助けようとしたり、人々の役に立とうとしたりする行動としている。さらには、向社会的行動と類似した概念・用語として利他的行動 (altruistic behavior or altruism) や援助行動 (helping behavior) なるものがあるが、Eisenberg & Mussen (1989) は利他的行動を、向社会的行動の一部で、他者のためになろうと“内発的”に動機づけられた行動としている。また、相川 (1989) は援助行動を、解決不可能あるいは困難な問題に直面している他者や他集団に問題解決のための利益を与えようという意図のもとに遂行される行動としている。そして、Davis (1996) に至っては利他的行動と援助行動という用語について、利他性と援助行動は互換的に扱い、双方ともに、自らに幾らかのコストが伴いながらも、ある他者のネガティブな状態を減じまたポジティブな状態を増大させることによってその他者の福利を改善する行動を指し、これらの“無動機的な (amotivational)” 概念は、社会生物学的な用語に由来すると述べている。以上のように概観してみると、向社会的行動と利他的行動・援助行動の定義はその行動の動機・意図という点において研究者間で異なるようであるが、本論では混乱を避けるため敢えて意図・動機ではなく行動の結果にのみ着目し、向社会的行動を“他者に利益をもたらし得る自発的な行動全般”と定義しておく。

2. 何故人を助けるか

“何故人を助けるか”と発した問いを考える上で、まず、1964年に発生した有名な“キティ・ジェノヴァーズ事件”に触れておきたい。犯人の男はアパートに住むキティ・ジェノヴァーズを襲うが、彼女の悲鳴を聞いた住人の男性が大声をあげ、犯人の男は一旦逃走する。しかし、犯人の供述によれば、再度襲ったら周囲は気づいても助けようと何らかの行動に出ることはないだろうと思ったという。犯人は再び彼女を襲うが、アパートの住人38名もの人々が彼女の悲鳴を聞いていたにもかかわらず誰も彼女を助けようとする手段をとらず、結局彼女は殺害されてしまう。多くの人が彼女の悲痛な叫びを聞いていたにもかかわらず、何故人々は彼女を助けようとしなかったのであろうか。人々は彼女の悲鳴を聞いても“不快感”や“不可解さ”まで感じ得ず、何もしなかったのであろうか。また、人々は夜アパートに居てそれぞれ自分なりの時間を過ごしていたため、彼女の悲鳴を聞いても彼女を助けようとするはその人たちにとって“障壁”あるいは“コスト”として感じ取られたためであらうか。それとも、人々は彼女の悲鳴を聞いて彼女の置かれている状況を“想像”するまでに至らず、彼女を助けようという意図が沸き起こらなかったものであろうか。

Batson (1987, 1991) によれば、向社会的行動の発生には3つのプロセスがあるという。1つ目は、喚起低減経路 (arousal reduction path) である。これは、他者の窮状を目撃することで自らも不快な喚起状態 (例えば、個人的苦痛や不安など) に陥り、その状態を低減するためにそ

の他者に対して向社会的行動をとるという見方である。2つ目は、強化経路 (reinforcement path) である。これは、他者の窮状を目撃するだけではその他者への向社会的行動は動機づけられず、援助することによる報酬 (物質的報酬、社会的賞賛、自尊心や誇りの維持・増大など) を得ること、あるいは援助しないことによる罰 (社会的非難、罪悪感、恥) を避けることを目的とし、向社会的行動にかかるコストと報酬あるいは罰の回避が天秤にかけられ、最終的にその他者に対する向社会的行動の遂行が決定されるという見方である。最後の3つ目は、共感-利他性経路 (empathy-altruism path) である。これは、他者の窮状を目撃することによってその他者の視点に立って同じ感情を代理的に経験 (すなわち、共感 (empathy) : Batson, 1991; Eisenberg, 1986) することを通じて、自分よりもその他者の福利を改善しようという意図が発生し向社会的行動が遂行されるとする見方である。

喚起低減経路の存在を示す証拠として、Gaertner & Dovidio (1977) やPiliavin, Dovidio, Gaertner, & Clark (1981) などの研究知見を挙げることができる。彼らの研究は方法が異なるものの共通して、苦痛にある他者を目撃した人の喚起状態は増大し、その喚起状態が増大するほど向社会的行動の発生も素早くなるという結果を提示している。こうした結果は、喚起状態の増大に伴ってそれを低減させようという意図も強まり、苦痛にある他者に対する向社会的行動が結果的に早まると読み解くことができる。

共感-利他性経路の存在を示す証拠は、特にBatsonら (Batson, Duncan, Ackerman, Buckley, & Birch, 1981; Batson, Dyck, Brandt, Batson, Powell, McMaster, & Griffitt, 1988; Batson, O'Quin, Fultz, Vanderplas, & Isen, 1983; Toi & Batson, 1982) の精力的な研究の中に見出すことができる。これらの研究のどれもが、他者の窮状に対して共感よりも個人的苦痛 (personal distress) に陥りやすい人²は他者の窮状から逃避可能な状況であれば向社会的行動を遂行しようとしなない傾向があるが、個人的苦痛よりも共感を経験しやすい人は逃避可能な状況であっても向社会的行動を遂行する傾向にあるという結果を導いている。すなわち、他者の窮状から逃避しても問題ないにもかかわらず、共感をしやすい人はその他者に対して向社会的行動をとりやすいということである。

しかし、強化経路の存在はこれまでのところ示唆されていないようである。例えば、Cialdini, Schaller, Houlihan, Arps, Fultz, & Beaman (1987) は、共感を喚起させた後に気分を高めるような経験 (例えば、お金や褒美をもらったり、気分を維持させる薬を飲んだという教示を受けた) をした場合、単に共感を喚起させたときに比べて向社会的行動が減少することを明らかにしている。これは、向社会的行動が遂行されるのに外的報酬を要するわけではないことを示唆しており、むしろ外的報酬が向社会的行動の遂行を阻害しているようでもある。また、先のBatson et al. (1988) の研究では、実験参加者に対して共感を喚起させた後に“殆どの方がその状況では援助しない”と教示をしたにもかかわらず、その後の参加者の向社会的行動が減少しないことも明らかになっている。上記の教示は、他者の窮状を無視しようとすることによって生じる個人的な罰としての罪悪感を打ち消すことを目論んで導入されたものである。それでも参加者の向社会的行動が減じなかったのである。このことは少なくとも、罪悪感という内発的な罰の回避のために向社会的行動が遂行されるという強化経路の存在を否定するものと言えよう。

以上、向社会的行動の発動のプロセスあるいは動機についてこれまでの知見を通覧するならば、以下の幾つかの問いが浮上してくる。(1) 向社会的行動の発生プロセスについて標準的な観点から

理解するならば、共感-利他性経路は確実に存在するようであるが、個人差という観点から理解しようとするとき、人によってはそこにその他の経路も関与しうる可能性があるのではないか。(2) Batsonらは強化経路における罰として恥や罪悪感を扱っているが、これらの情動を向社会的行動に対して単に罰として機能していると捉えてよいのであろうか。次章以降では、これらの問いについてさらに考究していく。

3. 人によって向社会的行動のプロセスは異なるか：個人差研究

(1) 共感傾向は逃避可能な状況で向社会的行動にいかに関与するか

複数の先行研究から共感-利他性経路の存在が示唆され、他者の窮状から逃避可能な状況でもその他者に共感することで向社会的行動が導かれるという共感の利他的な機能はどのような人にも少なくとも備わっているであろう。しかしそれはあくまで標準的・一般的なプロセスであって、相対的に共感の乏しいあるいは難しい人においては他者の窮状に対する知覚・認知・共感による向社会的行動の駆動以外の心のはたらきが生じていることがあるかもしれない。そこでまずは共感傾向の個人差と逃避可能な状況での向社会的行動との関連性を見ていく。

Eisenberg, Fabes, Miller, Fultz, Shell, Mathy, & Reno (1989) は、参加者に対する対人的反応指標 I R I (Interpersonal Reactivity Index: Davis, 1980) という質問紙尺度に対して回答を求めつつ、逃避可能な状況での参加者の向社会的行動を実験的に調査した。その結果、I R I の下位尺度である視点取得 (perspective taking) や共感的配慮 (empathic concern) ³ の傾向が高い人ほど逃避可能な状況で向社会的行動を多く見せることを明らかにした。なお、そうした関連は社会的望ましさ (social desirability) という変数を統制しても有意であった。一方で、I R I の他の下位尺度である空想 (fantasy) や個人的苦痛の傾向については有意な関連が見られなかった。これらの結果から、自分自身を社会的により良く見せようという意識が働きつつも他者志向的な視点取得から向社会的行動への影響パスは確実に存在するのに対し、一方自己志向的な空想や個人的苦痛は向社会的行動を発動させる要因ではないことが示唆される。

また、Carlo, Eisenberg, Troyer, Switzer, & Speer (1991) は Eisenberg et al. (1989) と同様の手続きで、しかし他者の苦痛の程度を操作して実験的調査を行っている。その結果、I R I の視点取得や共感的配慮は逃避可能なかつ他者の苦痛が強烈で参加者の感情を揺さぶる状況での向社会的行動とのみ関連が見られた。その関連は、参加者の社会的望ましさやその時の共感状態のレベルを統制しても有意なものであった。こうした結果から、向社会的行動の発動には“その時その場”の共感状態や社会的望ましさの傾向よりも個人が潜在的にもつ視点取得や共感的配慮といった他者志向的な共感傾向が重要に働いていることが示唆される。

これらの知見を振り返る限り、共感傾向は向社会的行動の遂行を決定づける重要な要因のようである。確かに、他者の立場や状況を想像する視点取得と、その他者の心情に感じ入り気遣う共感的配慮がなければ、その他者に何らかの利益をもたらさうような自発的な向社会的行動は芽生えないであろう。しかし、私たちは日常において常に他者の利益にばかり注意を向けているわけではなく、むしろ、(相対的にどちらに注意が向いているかには個人差があるものの) 自己自身と他者の双方の利益に対して注意を向け、双方の利益の維持・向上を念頭に置いているはずである。さらに言えば、ある文脈においては他者の窮状を察知していても、向社会的行動を発動させ

るまでに自己自身と他者の利益のどちらを優先すべきかという葛藤状態にあることもあるであろう。こうした葛藤状態を解消して向社会的行動に至るプロセスは共感状態あるいは共感傾向という側面だけでは説明しえないように思われる。これについてHoffman (2000) は、自己の利益に注意が向き他者の窮状を見過ごすことに対する罪悪感が予期的に喚起し、それが向社会的行動を促すと論じている。すなわち、共感以外に罪悪感などの社会的情動が自己と他者のどちらの利益を優先すべきかという葛藤状態に歯止めをかけ、向社会的行動の遂行に寄与しているのかもしれない。そこで次に、罪悪感や恥を代表とする社会的情動 (social emotion: Barrett, 1995) と向社会的行動の関連性についてこれまでの知見を振り返りながら論じていく。

(2) 社会的情動は向社会的行動といかに関連するか

本邦においては菊池 (1988) が向社会的行動尺度を作成して以来、向社会的行動の要因を特定しようとする研究が盛んに行われてきたが、近年、恥や罪悪感といった社会的情動と向社会的行動の関連性に関するデータも提示されている。例えば菊池 (2003) は、TOSCA-3 (Test of Self-conscious Affect-version 3: Tangney & Dearing, 2002) を日本語訳にした尺度によって測定された恥や罪悪感傾向と向社会的行動の関連性を検討している。その結果、恥傾向の高さと向社会的行動に関連はなかったのに対して、罪悪感傾向の高さは向社会的行動と有意な正の相関が見られた (ちなみに、IRIデータも同時に収集しており、共感的配慮や視点取得は恥や罪悪感の傾向を統制しても向社会的行動と有意な正の相関を示した)。また、菊池・有光 (2006) は、自ら開発したKA-JiKoKan-12という尺度によって恥や罪悪感の傾向を測定し、向社会的行動との関連性を検討している。その結果、菊池 (2003) とは若干異なり、罪悪感傾向の高さは同様に向社会的行動と有意な正の相関を示したが、恥傾向も向社会的行動との間に有意な正の相関関係を示した。恥に関する両研究の結果の相違については使用された尺度内容の相違を踏まえて議論すべきであろうが、これらの結果から、共感的配慮や視点取得といった他者志向的な共感傾向だけでなく恥や罪悪感といった社会的情動もまた少なくとも向社会的行動の発動に関わっているように思われる。

興味深い知見の一つにMalinowski & Smith (1985) がある。この調査では、他者を騙したときに罪悪感を経験しやすい人ほど、実験課題においては実際に他者を騙そうとしないことが明らかになった。これは、罪悪感特性の高い人は、現実には相手を出し抜いたり騙したりすることが可能な状況に置かれるとそうした行動にブレーキをかけやすいことを暗示しているようである。さらに言うならば、これは、先に挙げたBatsonらの言う罰としての罪悪感とは機能的・意味的には異なり、他者を出し抜いて自らの利益を高める可能性を察知した際にそこに罪悪感が内的に喚起し自らの行動を制御していることを匂わせ、Hoffman (2000) の言う“予期的な罪悪感 (anticipatory guilt) を窺わせる。そもそも罪悪感あるいは恥とはどのような情動であろうか。これらの情動の記述・定義についてはこれまでに多くの研究者が論じてきた (e. g. Barrett, 1995; Lewis, 1992, 1999; Mascolo & Fischer, 1995; Tangney & Dearing, 2002)。それゆえ研究者によって見解は多少異なるものの、その共通点を見出すならば、罪悪感も恥もともに、他者からの評価的フィードバックから感知したあるいは内的に保有している社会的規範やルールに沿って自己の善し悪しを評価することで生起する情動ということができよう。こうした定義からすると、一見、罪悪感や恥といった“自己評価的情動 (self-conscious evaluative emotion: Lewis, 1992)” は他者の窮状の目撃における向社会的行動と繋がりが無いように思えるかもしれない。しかし、その他者の

窮状の要因が何らかの形で自分自身にあると認識したならば、罪悪感や恥も無関係ではないであろう。例えば、他者の窮状を目の前にしたらならばできる限りその他者に手を差し延べるべきであるという社会的なルールを内在している人は、ある他者の窮状を目の前にして自分自身のある目的達成のための行動を遂行するためにその他者を回避しようという意図がはたらきまたそれを自覚したとき、そのルールに沿った自己評価によって罪悪感あるいは恥を喚起することもありうると思われる。この例えは、先で述べた予期的な罪悪感（あるいは恥）に近いものである。こうして理論的に見ていくと、他者の窮状を回避しようとしている自らを覚知したときに予期的に罪悪感や恥が喚起しうる可能性が考えられる。

他者の窮状に対して予期的に罪悪感や恥が生起するとすれば、そこにはどのようなメカニズムがあるのであろうか。これまでの知見を概観する限り、Hoffman (2000) がこの点について“スクリプト (script)” の役割に触れている。スクリプトとは、Schank & Abelson (1977) によって提唱された知識の表現形式の一つで、日常的に繰り返し経験される事象を、その事象を成り立たせている一連の出来事のつらなりとして表現する。例えば文章を読んで理解しようとするとき、その文章に人が日常的に繰り返し遭遇する事象の一部が含まれると、他の部分は明示的に書かれていなくても、読み手はスクリプトの働きによってそれらの部分を書かれていたのと同じように想起し、理解することができるのである。こうしたスクリプトが予期的に喚起される罪悪感や恥に対して機能するというのである。こうした情動反応に関わるスクリプトの機能については特に Lewis (1989) が“情動的スクリプト (emotional script)” という概念を取り上げて明快に論じている。彼によれば、情動的スクリプトとは状況、行為、自己・他者の動機づけというある一定の連鎖をなす知識で、それは世界に対する行為・情動を発現させるものであるという。また、それは情動的スクリプトに絡む必要最小限の情報によって喚起しうるものでもあるという。例えば、ある特定の状況を知覚・認知すれば、その状況に関わる情動的スクリプトが喚起し、それを通じてその状況で生じうる自分自身や社会にとって適切な情動を経験したり理解することができたりするのである。Lewisは恥や罪悪感に絡む情動的スクリプトの構成のあり方について特に論じているわけではないが、ある特定状況に対する失敗や逸脱、親のしつけや他者の反応、恥や罪悪感の経験とそれに基づく行為の連鎖が出来事として繰り返されれば、それらは一定の連鎖をなして恥あるいは罪悪感スクリプトとして構成されうることは想像に難くない。さらに言えば、ある他者の窮状という状況、その状況を見過ごす行為、その行為に対する親の非難や叱責といった他者の反応、親などの反応に対する恥や罪悪感の経験という一連の出来事を繰り返し経験することがあれば、他者の窮状と恥や罪悪感が結びついたスクリプトが構成されることもあるだろう。このようにして構成された罪悪感あるいは恥のスクリプトは、ある他者の窮状を目撃あるいはそれを見過ごすという意図の自覚に対して、特にその他者の窮状の原因が自分自身でなくとも連鎖的に罪悪感や恥を喚起させるのではないだろうか。

本章では、まず、ある他者の窮状を目撃した際に他者の立場に立ってその他者と同じ感情を代理的に経験した場合でも、その他者に向社会的行動を遂行するまでに自己よりも他者の利益を優先させるような意思決定がなければその行動が遂行されることはなく、他者よりも自己の利益を優先しようとする意図が生じそれを自覚することによって予期的に生じる罪悪感や恥がそこにはたらき利益優先の矛先をシフトさせる可能性を論じた。また、そうした予期的な罪悪感や恥の生起メカニズムについて情動的スクリプトおよびその構成という観点から試論を展開した。

しかしながら、向社会的行動に対する恥や罪悪感の役割を考える以上、こうした試論でも説明の及ばない幾つかの問いがある。(1) 予期的に喚起した罪悪感や恥は自己と他者のどちらの利益を優先すべきかという葛藤に歯止めをかけ利益優先の矛先を他者にシフトさせると論じたが（また Batson が論じる、強化経路における罰としての罪悪感という見方の検証も含めて）、罪悪感や恥という情動はそもそもどのような機能を備えているのであろうか。また、罪悪感と恥は機能的な観点からして違いがあるのであろうか。(2) 他者の窮状を目撃することによって予期的に罪悪感や恥が喚起するとして、それは共感-利他性経路に対して独立して作用するのであろうか、それとも媒介的に作用するのであろうか。

4. 恥や罪悪感はいかなる機能を有するか

Frank (1988) によれば、罪悪感を主とする社会的情動は近未来的なあるいは中長期的な適応のために重要であるという。彼は、ヒトは他種に比して高度な“個体識別能力”を有するが、そうしたヒトが個体間での“相互交渉の繰り返し”の中で利他的行動より自己利益追及行動を度々選択することのほうが最終的に自己利益の獲得に繋がるのか否かを分析し、論を展開している。しかし、どうも自己利益追求行動だけでは最終的な自己利益獲得には繋がらないようである。むしろ、ある個体が罪悪感を主とする情動によって自らの利益追求行動に頻繁にブレーキをかけると、そうした情動の表出や行動によって形成されるその個体に対する利己的でないという他個体の認識や、個体間で他個体のその認識が伝播されてその個体に対する“評判”が発生することを通じて、他個体からの利他的行動が増大し、それによる利益がその個体自身の自己利益追及行動による利益の積み重ねよりも上回るというのである。こうした論からすれば、Batson が論ずる、罪悪感や恥が罰として一役買っているとする見方以上の機能を罪悪感や恥は有しているようであり、罪悪感を主とする社会的情動は“今、ここで”の自己自身の行動の調整のために、そして最終的な生き残りに繋がる“近未来的”適応のために進化の過程で出現してきたと考えることができるかもしれない。

近年、情動を、生体と環境の関係を確立・維持・崩壊させるプロセスとする機能を重視した見方 (e. g., Campos, Campos, & Barrett, 1989; Malatesta & Wilson, 1988; Frijda, 1986) が隆盛になりつつあるが、それは情動が生体の生物学的・社会的適応にかなりのところ寄与しているからだと言える。恥や罪悪感といった情動についてもそれは例外ではなく、近年では複数の研究者がそれら情動の機能的側面を強調している。例えば、Malatesta & Wilson (1988) は、情動のシグナル的性質が適応的に機能し、特定の先行状況に対応した各種情動は、その状況で自己にとって適切な行為を発動させるためにその状況において重要な情報を主観的経験や神経生理学的変化を通じて自己自身にフィードバック的に送信する“自己システム内の機能”と、その状況の性質やその状況で生じた自己の内的状態などの情報を他者に送信する“対人システム内の機能”をもつとしている。そうした見方に依拠して、恥は自己システム内機能として他者から受けるそれ以上のプライバシー侵害を阻止し、対人システム内機能としてプライバシー保護を他者に求めるためのシグナルを周囲に送信すると考えている。一方、罪悪感とは異なり、自己システム内機能として償い行動を促進し、対人システム内機能として他者から攻撃される確率を減らすための服従的姿勢を生成するとしている。彼女らの情動の見方はある意味、“その時その場”での環

境との関係における情動の機能を述べているに過ぎない。しかしBarrett (1995) はさらに制御機能という観点から情動の経験の重要性を論じている。彼女は、自己システム内機能に対応した“行動制御機能 (behavioral regulatory function)” や対人システム内機能に対応した“社会的制御機能 (social regulatory function)”に加えて、“内的制御機能 (internal regulatory function)”を挙げ、それらが環境への適応において重要であるとする。内的制御機能とは言わばLazarus (1991) の論ずる情動の“アンプ的性質”に相当するものと言え、ある状況での認知的評価や身体的行為を増幅して個体にフィードバックすることで、そうした状況の重要性や対処方略などを記憶の中に迅速に根づかせるはたらきと言えよう。彼女の主張によれば、恥は行動制御機能として他者の評価から回避する行動を動機づけ、社会的制御機能として他者に対して敬意や服従、あるいは自己自身がその他者に比して価値のない存在であることを伝達し（そして、結果的に他者の攻撃や軽蔑などの反応をも制御し）、そして、内的制御機能として他者の反応に基づくあるいは内的な基準の重要性を認識させそれまで持っていた自己に対する客体的な見方を精緻化・修正するという。罪悪感、他者や周囲のダメージの修復を動機づけ、何が適切な行動かを知りえていることや、適切な行動をとらなかったことへの悔い、それ以後は適切な行動に努めるという意図を他者に伝達し、そして内的に基準の重要性を認識させるとともに他者にダメージを与えても修復可能だという自己効力感に基づく自己の主体性を発達させるという。

こうして理論的に見ると、恥も罪悪感とともに、自らの行動が他者からのフィードバックに基づくあるいは内在化している基準に反していると自覚したならばその行動を制御するという機能を有し、さらには近未来的適応のために自己および他者の認識を発達させる機能をも有しているようである。しかし、上記で取り上げた各研究者の考えを深く解しそれらの共通点を見出してみるならば、その制御の方向性には恥と罪悪感で違いがあり、恥における制御の動機づけは自己の保護であるのに対し、罪悪感における制御の方向性は自己だけでなく他者のケアや保護にあるようである。そうであるとすれば、向社会的行動の発動プロセスにおいて自己利益追求的な行動を制止させるという点において恥と罪悪感では異なる可能性が考えられ、相対的に、自己の保護に関連する恥は自己利益追求を制止させる方向とは無関係に働くのに対して、他者のケア・保護に関連する罪悪感はそのような方向に働く可能性が考えられる。

5. 恥や罪悪感は共感といかに関連するか

3章では、他者の窮状の目撃に対して予期的に罪悪感や恥が生起して向社会的行動の発動に関与すると論じつつも、その罪悪感と恥の機能に違いがあるのか、また共感-利他性経路（共感から向社会的行動への直接的な影響パス）に対するそれらの関与は独立的なのか媒介的なのかという問いを發した。そして4章では、恥は自己保護的であるのに対して罪悪感、他者のケア・保護という方向性をもつという観点から向社会的行動への関与のあり方が恥と罪悪感で異なるとしながらも、共感-利他性経路に対する恥や罪悪感の位置づけについて論じることはなかった。ところで、脚注2でも述べたが、恥と罪悪感と同様に、共感にも自他の方向性の違いという観点から2種の共感があることが知られている (Davis, 1996)。一つはこれまでに述べてきた向社会的行動の発動に繋がるもので、他者の立場に立ってその他者の感情を代理的に経験することを通じて他者への関心や悲しみといった情動を伴いつつ他者の不快を低減しようとするという意味での“他者

志向的な共感（同情（sympathy : Batson, 1991; Eisenberg & Fabes, 1990）と呼ばれるものに近い）である。もう一つは、向社会的行動と無関係なもので、他者の苦痛に巻き込まれた、不快や不安といった情動的苦痛を伴う“自己焦点的な個人的苦痛（personal distress）”である（Batson, 1991; Eisenberg & Fabes, 1990）。向社会的行動の共感-利他性経路に対して恥や罪悪感が仮に“媒介的”に作用しているならば、それら情動は上記2種の共感と何らかの関係があるであろう。そこで本章では、恥や罪悪感と共感の間に構造的あるいは発達の関連があるのかについて複数の研究知見を通じて評価し、恥と罪悪感それぞれが2種の共感を礎としている可能性について論じることにした。

Tangney (1995) によれば、恥は自己焦点的で個人的苦痛の要素を含む一方、罪悪感とは他者志向的で共感的関心の要素を含むという。恥や罪悪感の個人差が共感といかに関連するかについては国の内外を問わず多く調査・検討されてきた（e. g., 有光, 2006; 石川・内山, 2001, 2002; 菊池・有光, 2006; Tangney, 1991, 1995; Tangney & Dearing, 2002）。それらの研究知見をまとめて述べるならば、恥は他者志向的な共感と負の相関関係にあるあるいは無相関の関係にあるが、個人的苦痛とは正の相関関係にあることが示されてきた。それに対して、罪悪感とは個人的苦痛と正の相関関係にあるあるいは無相関の関係にあるが、他者志向的な共感とは正の相関関係にあることが示されてきた。恥と罪悪感とは強力な相関関係にあることが多くどちらかが媒介的に作用して見かけの相関を生み出している可能性があることから、どちらかを制御した偏相関係数を求めることが多いが、偏相関分析で上記とほぼ同様の関係が見出されている。こうした知見から、他者の窮状に対して個人的苦痛を経験しやすい傾向を元来備えている人は自らのある種の逸脱を感知した際には恥を経験しやすいようであり、恥の発達には個人的苦痛の経験が礎としてあるように思える。また同様に、他者志向的に共感しやすい人ほど自らの逸脱に対して罪悪感を経験しやすいようであり、罪悪感の発達には他者志向的な共感の経験が基礎としてあるように思える。

Zahn-Waxler et al. (1992) は、日常において1歳代の子どもが他者の痛みを目撃する条件と子ども自身が原因で他者が痛がる場所を目の当たりにする条件での子どもの表出・行動を観察したところ、前者の条件の向社会的行動は後者の条件のそれより先行して出現するものの、両条件の向社会的行動は連動して発達することを示した。これは、後者の条件に対する向社会的行動の要因が罪悪感であるかは正確には不明であるが、罪悪感が他者志向的な共感を基盤に発達する可能性を物語っているように思われる。Lewis (1992) も、自己意識（objective self-awareness）の芽生えとともに共感や照れ（embarrassment）などが出現し、さらに自己意識によって自他の関係性を客体的に見ることが可能になって社会的規範やルールを構成・内在化するようになると共感を基盤に罪悪感が出現し、照れを基盤に恥が出現すると述べている。Lewis (1992) の恥や罪悪感などの自己意識的情動の発達プロセスに対して若干異なる見解（Barrett, 1995; Saarni et al., 2006）もある⁴が、Lewisの見解にしたがうならば、恥はともかく罪悪感とは共感を基盤として発達し、発達の観点からしても罪悪感とは共感と関連深いと考えられる。

罪悪感が共感をベースにしている可能性は幾つかの幼児・児童の発達研究の知見からも垣間見ることができる。例えば、児童を対象とした研究（Krevans & Gibbs, 1996）は、物語の人物の視点に立ってその人物の感情を代理的に経験しやすい子どもは別の物語の人物の心情に対して罪悪感を帰属させやすいことを明らかにしている。また、Chapman, Zahn-Waxler, Cooperman, & Iannotti (1987) は幼児・児童を対象として調査したところ、物語の人物の心情に対して共感を帰属させやすい子どもは現実場面で乳児の泣きや子猫の困難事態に対して向社会的行動をとりや

すいことを示した。しかしさらに興味深いことに、物語の人物の心情に対して罪悪感を帰属させやすい子どもは乳児の泣きや子猫の困難事態に対してだけでなく大人の苦痛に対しても向社会的行動をとりやすいことが示された。これは、共感に基づく向社会的行動よりも罪悪感に基づくそのほうがそのターゲットに広がりをもつことを示唆し、共感よりも罪悪感を帰属させやすい子どもは向社会的行動を向けるターゲットに対してコミットしやすいあるいは責任感をもちやすいとも考えられる。共感と罪悪感や恥の違いを構造的あるいは発達的に見るならば、共感が他者の視点に立ってその他者の苦痛や感情を代理的に経験することであるのに対し、罪悪感や恥はそうした経験だけでなくその他者の苦痛や感情変化に自分自身が影響を及ぼしていることまたはその自覚が伴わなければ生起しないという点に違いがあると言えるであろう。さらに、向社会的行動のプロセスではその行動をターゲットにコミットさせるという点においては、共感よりも罪悪感のほうが強力だと言えるであろう。

こうして本章を振り返りまとめると、まず、罪悪感は共感をベースに発達し、共感と構造的にも関連しているが、恥は共感とは発達的にも構造的にも関連性が薄いと考えられる。そして、特に罪悪感は共感-利他性経路に対して媒介的な作用を及ぼしていると考えられる。さらに、罪悪感はそれを経験している個人を他者の窮状に対してコミットさせるあるいはその個人に他者の窮状に対する責任を付与させると考えられる。

6. 恥や罪悪感は向社会的行動の発動にいかにかに寄与するか

これまでの論は、次のようにまとめることができよう。(1)向社会的行動の発動において共感-利他性経路は主要なパスであるが、それ以外の影響パスも向社会的行動を促進するあるいは阻害する形で存在する。(2)日常において自己と窮状にある他者のどちらの利益を優先すべきかという事態でその他者から回避しようとする意図を自覚したとき、予期的に罪悪感を主とする情動が喚起することがある。(3)罪悪感は他者志向的な共感と構造的にも発達的にも関連があるのに対して、罪悪感と似た恥は共感とはそうした関連性がない。(4)罪悪感や恥が向社会的行動の発動において単に罰として機能しているわけではなく、他者の窮状を目撃して喚起した罪悪感はそれを感じている本人の自己利益追求的な行動に歯止めをかけ、また本人をその他者にコミットさせる機能をもつようである。以上のように向社会的行動の発動に対して罪悪感や恥がいかにかに作用するかを論じてきたが、本章では再び向社会的行動のプロセスに目を転じ、そのプロセスにおける罪悪感や恥の位置づけを呈示したい。

Eisenberg (1986; Eisenberg, Fabes, & Spinrad, 2006) は向社会的行動に関する先行研究をレビューし、Figure1に示すヒューリスティックなモデルを呈示している。(1)このモデルでは、まず生物学的要因(遺伝的特質や気質)が本人の個人的特徴(社会的認知発達、共感性、社会性などの特性)や社会化(養育者との相互作用など)に影響する。本人の個人的特徴と社会化は相互に影響を及ぼしあい、それらは状況に関する客観的特徴と合わせてある特定の文脈における他者の要求や苦痛という事態に対する解釈に作用する。尚も個人的特徴と社会化は相互に影響しあい、本人の向社会的傾性を構成していく。(2)本人の状況に対する解釈のあり方によっていかなる向社会的行動が有用かの特定や特定された向社会的行動を遂行する能力が自分自身にあるかの認知が決まっていく。さらに本人の気分状態といった一時的な状態もその本人の状況に対する注意

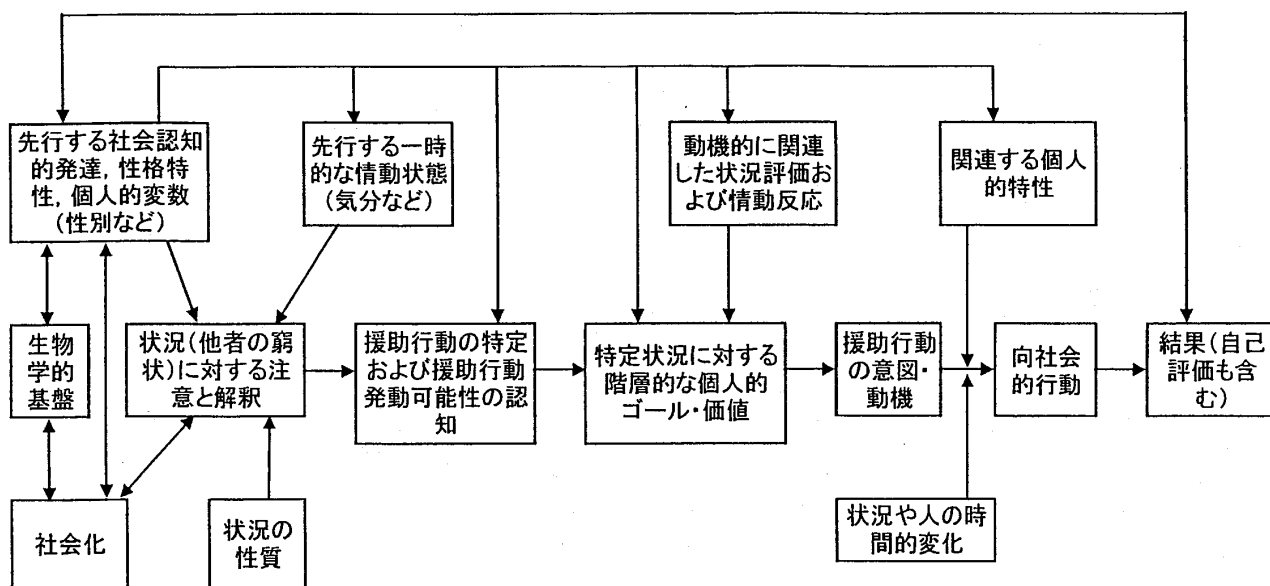


Figure1 向社会的行動のヒューリスティック・モデル (Eisenberg et al. (2006)を基に作成)

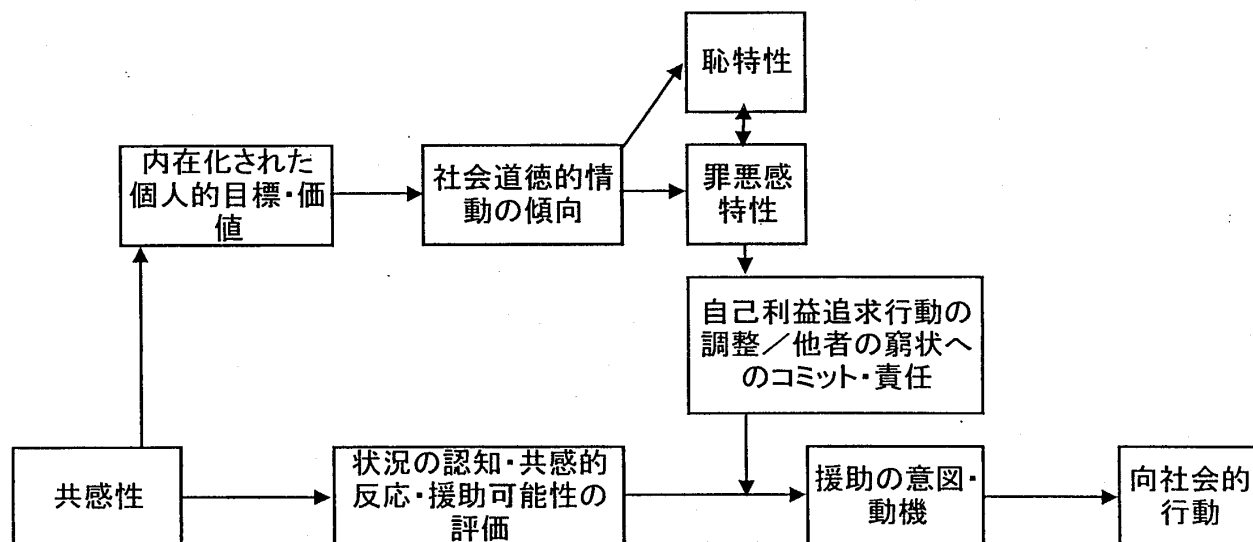


Figure2 向社会的行動のプロセスにおける罪悪感や恥の影響を表すモデル

や解釈のあり方を決定する。(3)本人が自分自身は向社会的行動を遂行する能力があると認知したならば、さらにそれを遂行するために遂行しようという意図をもたなければならない。こうした意図は、本人自身の情動的反応（例えば、同情か個人的苦痛など）や、向社会的行動のターゲットとなる他者との関係性（それは情動的反応や見積もられる向社会的行動のコストと利益などに影響を及ぼす）、その他者の要求や苦痛の原因帰属といった、向社会的行動の動機に関連した状況評価や情動的反応の影響を受ける。また、そうした意図は、社会的承認への関心、価値観、個人的な目標、自己アイデンティティといった利他性に関連する先行の個人的要因の影響をも受ける。しばし、ある状況において個人の目標、欲求、価値観は錯綜し、向社会的行動の遂行において葛藤を引き起こし、いずれかを優先しなければならない。また、個人の目標、欲求、価値観は個人によってあるいは状況によって変動し得るし、加齢に伴っても変動し得るものである。このような特定状況における階層的な個人的目標や価値観は子どもの向社会的行動の意図だけでなく助けたいという欲求にも影響するであろう。しかし、そうした意図や欲求があったとしても、本人の

もつ向社会的な身体的・心理的・物質的能力が欠如していたり、他の誰かによって窮状にある他者が援助を受けて向社会的行動の遂行の機会を失ったりすれば、本人の向社会的行動は遂行されない。

以上のようにEisenbergのモデルは、多種多様な要因が複雑に絡み合う、向社会的行動の発動プロセスのダイナミクスを示すものである。このモデルに照らし合わせると、自己の利益優先に対する葛藤や予期的な罪悪感（あるいは恥）は向社会的行動の動機に関連した状況評価および情動的反応に対応するものであろう。それらは、先行する社会的認知の発達や共感性を含む性格特性などが基盤としてあり、向社会的行動の意図に作用するものである。このモデルをベースとして、罪悪感と他者志向的な共感の関連性や罪悪感・恥の向社会的行動に対する機能について図式化するならば、Figure 2のようになる。この図式に示すプロセスにしたがって向社会的行動が発動されるのかについては今後、質問紙法や実験法などの種々の方法論にしたがって実証していく必要があるだろう。

結 び

本論では、向社会的行動の発動において恥や罪悪感といった社会的情動が関与する可能性について、向社会的行動を遂行する個人の内的プロセスという観点から筆者なり論じてみたつもりである。そして最終的に、その可能性をモデルとして構成した。筆者はそのモデルに沿って質問紙法に基づくデータ収集を行ったが、そのデータの呈示および検討・議論については本論が冗長になりうることを懸念し差し控え、別稿にて論ずることとしたい。

また、向社会的行動が他者に対して発動される以上、その行動を個人内プロセスという視点からだけでなく、他者や関係性の観点あるいは社会文化的な観点から論じることが必要であった。そうすれば、向社会的行動の意味、あるいは自己、他者との関係性、そして社会の形成・維持にとってそれがいかに重要であるかを論じることができたかもしれない。そうした観点から考究することを自らの今後の課題とし、ひとまずここで論を結ぶこととしたい。

脚 注

- 1 本論は、日本心理学会第70回大会（九州大学、2006年11月5日）におけるワークショップ“向社会的行動の動機の問題”にて発表した。
- 2 Batson (1991) によれば、共感には“他者志向的 (other-oriented)”な共感と“自己焦点的 (self-focused)”な個人的苦痛の2種があるという。他者志向的な共感は自分自身を他者の立場に置くことによって生じ他者に対する配慮や悲しみなどの情動を伴い、他者の不快の低減を試みるような反応を導くものである。一方、個人的苦痛は他者の苦痛に自らが巻き込まれる形で発生し、不快や不安などの情動的苦痛を伴うものである。
- 3 視点取得は他者志向的な共感の認知的側面として、共感的配慮はその情動的側面として位置づけられる (e.g., Davis, 1996)。
- 4 Lewis (1992, 1993) は、恥や罪悪感などの情動はその出現が自己鏡像認知やその他の自己発達の指標と関連するという観点から“自己意識的 (self-conscious)”情動と呼んでいる。また先でも少し触れたように、Barrett (1995) はそうした情動を“社会的”情動と呼ぶが、それはそうした情動の発達が社会化の影響を受け、またそうした情動の生起には他者に対する評価 (appreciation) が伴うと考えているからである。さらに、Saarni et

al. (2006) は恥や罪悪感などの情動を“他者意識的 (other-conscious)” 情動と呼んでいる。それは、照れ、恥、罪悪感、誇りなどの情動が怒り、悲しみ、恐れ、軽蔑などの他者によって伝達される情動の意味を理解することによって生じると考えているからである。さらに彼女らは、他者の情動の知覚、各種情動間の弁別、情動がどの人物に向けられたかという方向性の理解などの他者の情動の意味的理解に関わる能力が発達し、加えて他者の情動の生起に対する責任を自覚することが可能にならなければそうした情動の発現はないと論じている。具体的には、自らの何らかの行動によって他者が軽蔑、嫌悪、怒り、悲しみなどを生起したことを自覚した際には恥や照れが、他者が悲しみ、痛み、落胆、恐れなどを引き起こしたことを自覚した際には罪悪感が生じるという。そして、こうした各種情動のコミュニケーションとそれへの気づきが繰り返されることを通じて、恥と罪悪感それぞれは社会化されていくというのである。以上のように、恥や罪悪感の生起や発達については研究者間で若干の相異があるようである。

文 献

- 相川 充 (1989). 援助行動 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一(編) 社会心理学パースペクティブ 1. 誠信書房.
- 有光興記 (2006). 罪悪感, 羞恥心と共感性の関係 心理学研究, 77, 97-104.
(Arimitsu, K. (2006). Guilt, shame/embarassment, and empathy. *The Japanese Journal of Psychology*, 77, 97-104.)
- Barrett, K. C. (1995). A functionalist approach to shame and guilt. In J. P. Tangney & K. W. Fischer (Eds.), *Self-conscious emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press. Pp. 25-63.
- Batson, C. D. (1987). Prosocial motivation: Is it ever truly altruistic? In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology (Vol. 20)*. New York: Academic Press. Pp. 65-122.
- Batson, C. D. (1991). *The altruism question: Toward a social-psychological answer*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Batson, C. D., Duncan, B. D., Ackerman, P., Buckley, T., & Birch, K. (1981). Is empathic emotion a source of altruistic motivation? *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 290-302.
- Batson, C. D., Dyck, J. L., Brandt, J. R., Batson, J. G., Powell, A. L., McMaster, M. R., & Griffitt, C. (1988). Five studies testing two new egoistic alternatives to the empathy-altruism hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 52-77.
- Batson, C. D., O'Quin, K., Fultz, J., Vanderplas, M., & Isen, A. M. (1983). Influence of self-reported distress and empathy on egoistic versus altruistic motivation to help. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 706-718.
- Bischof-Kohler, D. (1991). The development of empathy in infants. In M. E. Lamb & H. Keller (Eds.), *Infant development: Perspectives from German-speaking countries*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp. 245-273.
- Calro, G., Eisenberg, N., Troyer, D., Switzer, G., & Speer, A. L. (1991). The altruistic personality: In what contexts is it apparent? *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 450-458.
- Campos, J. J., Campos, R. G., & Barrett, K. C. (1989). Emergent themes in the study of emotional development and emotion regulation. *Developmental Psychology*, 25, 394-402.
- Chapman, M., Zahn-Waxler, C., Cooperman, G., & Iannotti, R. (1987). Empathy and responsibility in the motivation of children's helping. *Developmental Psychology*, 23, 140-145.
- Cialdini, R. B., Schaller, M., Houlihan, D., Arps, K., Fultz, J., & Beaman, A. L. (1987). Empathy-based helping: Is it selflessly or selfishly motivated? *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 749-758.
- Davis, M. H. (1980). A multidimensional approach to individual differences in empathy. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, 10, 85.
- Davis, M. H. (1996). *Empathy: A social psychological approach*. Colorado: Westview Press.
- Eisenberg, N. (1986). *Altruistic emotion, cognition, and behavior*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Eisenberg, N., & Fabes, R. A. (1990). Empathy: Conceptualization, measurement, and relation to prosocial

- behavior. *Motivation and Emotion*, 14, 131-149.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., Miller, P. A., Fultz, J., Shell, R., Mathy, R. M., & Reno, R. R. (1989). Relation of sympathy and personal distress to prosocial behavior: A multimethod study. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 55-66.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., & Spinrad, T. L. (2006). Prosocial Development. In W. Damon (Editor-in-Chief), R. M. Lerner (Editor-in-Chief), & N. Eisenberg (Vol. Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 3. Social, emotional and personality development (6th ed.)*. New York: Wiley. Pp. 646-718.
- Eisenberg, N., & Mussen, P. (1989). *The roots of prosocial behavior in children*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Frank, R. H. (1988). *Passions within reason: The strategic role of emotions*. New York: Norton.
(フランク, R. H. 山岸俊夫(監訳) (1995). オデッセウスの鎖—適応プログラムとしての感情 サイエンス社)
- Frijda, N. (1986). *The emotions*. New York: Cambridge University Press.
- Gaertner, S. L., & Dovidio, J. F. (1977). The subtlety of white racism, arousal, and helping behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 691-707.
- Hoffman, M. L. (2000). *Empathy and moral development: Implications for caring and justice*. New York: Cambridge University Press.
- 石川隆行・内山伊知郎 (2001). 5歳児の罪悪感に共感性と役割取得能力が及ぼす影響について 教育心理学研究, 49, 60-68.
(Ishikawa, T., & Uchiyama, I. (2001). Empathy and role-taking ability: Guilt feelings in 5-year-old preschoolers. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 49, 60-68.)
- 石川隆行・内山伊知郎 (2002). 青年期の罪悪感と共感性および役割取得能力の関連 発達心理学研究, 13, 12-19.
(Ishikawa, T., & Uchiyama, I. (2002). The relations of empathy and role-taking ability to guilt feelings in adolescence. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, 13, 12-19.)
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する: 向社会的行動の心理とスキル 川島書店.
- 菊池章夫 (2003). TOSCA-3 (短縮版) 日本語版の検討 岩手県立大学社会福祉学部紀要, 5, 35-40.
- 菊池章夫・有光興記 (2006). 新しい自己意識的感情尺度の開発 パーソナリティ研究, 14, 137-148.
(Kikuchi, A., & Arimitsu, K. (2006). Construction of self-conscious emotion scale. *The Japanese Journal of Personality*, 14, 137-148.)
- Krevans, J., & Gibbs, J. C. (1996). Parents' use of inductive discipline: relations to children's empathy and prosocial behavior. *Child Development*, 67, 3263-3277.
- Lewis, M. (1989). Cultural differences in children's knowledge of emotional scripts. In C. Saarni & P. L. Harris (Eds.), *Children's understanding of emotions*. New York: Cambridge University Press.
- Lewis, M. (1992). *Shame: The exposed self*. New York: Free Press.
(ルイス, M. 高橋恵子(監訳) (1997). 恥の心理学. ミネルヴァ書房.)
- Lewis, M. (1993). Self-conscious emotions: Embarrassment, pride, shame, and guilt. In M. Lewis & J. Haviland (Eds.), *The handbook of emotions*. New York: Guilford Press. Pp. 563-573.
- Malatesta, C. Z., & Wilson, A. (1988). Emotion/cognition interaction in personality development: A discrete emotions of functionalist analysis. *British Journal of Social Psychology*, 27, 91-112.
- Malinowski, C. I., & Smith, C. P. (1985). Moral reasoning and moral conduct. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 1016-1027.
- Mascolo, M. F., & Fischer, K. W. (1995). Developmental transformation in appraisals for pride, shame, and guilt. In J. P. Tangney & K. W. Fischer (Eds.), *Self-conscious Emotions: Shame, Guilt, Embarrassment, and Pride*. New York: Guilford Press. Pp. 64-113.
- Mussen, P. & Eisenberg-Berg, N. (1977). Roots of caring, sharing, and helping: *The development of prosocial behavior in children*. Freeman.
- Piliavin J. A., Dovidio, J. F., Gaertner, S. L., & Clark, R. D. (1981). *Emergency intervention*. New York: Academic Press.

- Saarni, C., Campos, J. J., Camras, L. A., & Witherington, D. (2006). Emotional development: Action, communication, and understanding. In W. Damon (Editor-in-Chief), R. M. Lerner (Editor-in-Chief), & N. Eisenberg (Vol. Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 3. Social, emotional and personality development (6th ed.)*. New York: Wiley. Pp. 226-299.
- Schank, R. C. & Abelson, R. P. (1977). Scripts, plans, goals and understanding.
- 杉山憲司 (1991). 愛他行動. 繁多 進・田島信元・青柳 肇・矢沢圭介(編) 社会性の発達心理学. 福村出版.
- Tangney, J. P. (1991). Moral affect: The good, the bad, and the ugly. *Journal of Personality and Social Psychology*, *61*, 598-607.
- Tangney, J. P. (1995). Shame and guilt in interpersonal relationships. In J. P. Tangney & K. W. Fischer (Eds.), *Self-conscious emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press. Pp. 114-139.
- Tangney, J. P., & Dearing, R. L. (2002). *Shame and guilt*. New York: Guilford Press.
- Toi, M., & Batson, C. D. (1982). More evidence that empathy is a source of altruistic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, *43*, 281-292.
- Zahn-Waxler, C., Radke-Yarrow, M., Wagner, E., & Chapman, M. (1992). Development of concern for others. *Developmental Psychology*, *28*, 126-136.